

令和元年度事業報告書

公益財団法人肥後医育振興会

熊本県における医学振興に必要な教育・研究の助成及び委託事業を行い、もって地域医療の向上と県民の健康増進及び日本国内外の医学・医療の進展に寄与するため、次の事業並びに支援を行った。

1. 医学教育・研究の助成（公1）

熊本県下の医・歯・薬・保健学系教育機関や医療機関に属する若手の個人又はグループに対して医学研究助成金を授与するため公募を行い、16名の応募者の中から選考委員会による厳正な選考の結果、以下の4名に授与した。

なお、研究助成金の授与とともに「肥後医育振興会学術奨励賞」を付与することとした。

山崎 昌哉（35才） 熊本大学大学院医学教育部 博士課程2年 がん生物学

「膵がんにおける腫瘍内不均一性と治療抵抗性の解明」

後藤 理沙（34才） 熊本大学病院 医員 乳腺・内分泌外科

「エストロゲン受容体陽性HER2陰性原発乳癌の予後に関連のある遺伝子発現の検討」

朝光 世煌（28才） 熊本大学発生医学研究所 特任助教 ゲノム神経学

「筋強直性ジストロフィー1型の神経変性病態の解明と症状改善薬の開発」

吉岡 潔志（35才） 脳梗塞リハビリテーションセンター熊本 研究員

「慢性期脳卒中片麻痺患者に対する個別運動療法による歩様変化の検証」

2. 医学国際交流の支援（公1）

熊本県下の医・歯・薬・保健学系教育機関や医療機関に属する外国人留学生に対して奨学金を授与するため公募を行い、選考委員会による厳正な選考の結果、以下の3名に奨学金を授与し、「肥後医育振興会優秀留学生表彰」を付与することとした。

ホン ソンヒョン

洪 性賢 熊本大学大学院医学教育部 研究生（韓国）

フ リョウホウ

付 凌峰 熊本大学大学院医学教育部 博士課程2年（中国）

ユウ ギホウ

遊 宜芳 熊本大学大学院保健学教育部 研究生（台湾）

3. 熊本県民への医学医療情報提供活動（公2、公3、収1）

(1) 「肥後医育塾」公開セミナーの開催（公2）

県民に対して、定期的に医学・医療情報を提供し、県民とともに考える健康と医療を目指す目的で、一般財団法人化学及血清療法研究所並びに熊本日日新聞社との共催で、市民公開セミナーを年3回開催した。

年間テーマとして「感染症とアレルギー」を取り上げ、自分や家族を守るために、感染症、アレルギーとどう戦えばよいのか、その正しい知識と最新医療を紹介した

第1回は、「食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、じんましん、薬疹～予防と治療の最前線」(R1.7.21、ホテル熊本テルサ)、第2回は、「あなたもかかる？知っておきたい感染症」(R1.10.20、ホテル熊本テルサ)、第3回は、「克服したい！花粉症とぜんそくの最新治療」(R2.2.23、ホテル熊本テルサ)の演題で開催し、それぞれ約270名、約100名、約100名の参加者があり、後日熊本日日新聞紙面(R1.8.30、R1.11.22、R2.3.26付)及び本財団のホームページ上で内容を県民に公開した。

(2) 北里柴三郎博士顕彰事業「新型コロナウイルス感染症を考える」の開催(公2)

新札の顔・北里柴三郎博士顕彰事業として、「新型コロナウイルス感染症を考える」と題する講演会を3月29日に熊本日日新聞社で開催した。感染拡大防止のため聴衆を入れず、講演採録をホームページに掲載の他、4月8日付熊本日日新聞紙面に掲載、併せて講演動画をYouTubeで公開した。

熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター教授の松下修三氏と熊本大学大学院生命科学研究部呼吸器内科学講座教授の坂上拓郎氏の2人が座長を務め、県内の医療関係者が感染症の対処方法などについて解説した後、事前に募集した質問に答えるコーナーが設けられた。

また、熊本大学名誉教授の二塚信氏による「明治の感染症と北里柴三郎博士」と題する講演も行われた。

(3) 第10回「熊本県医療人育成総合会議」の開催(公3)

米国における外国人医師免許取得試験受験資格の一つとして、卒業した大学医学部(医科大学)が世界共通の認定を受けていることが、2023年の受験者から必要となった。日本人の医学部卒業生の中で米国での臨床医療活動を志す若手医師は今後、増加するものと思われる。しかし、日本の医学教育は独自に発展してきたところもあり、国際的標準化への対応には適さない部分が残されている。この世界標準化の特徴の一つは、総合大学単位ではなく、医学部(医学科)単位で評価・認定を受けることにある。ところがその一方で、チームワーク医療の促進のために、医学系、薬学系及び保健学系学生の同時参加型教育の推進が求められてきている。また薬学系、保健学系においてもそれぞれの世界標準化教育に関心が高まってきたこのような医療人育成教育の課題を受けて、第10回目の熊本県医療人育成総合会議では、医学・薬学・保健学教育の世界標準化と診療参加型臨床実習をテーマとした。

会議では、日本医学教育評価機構の奈良信雄常任理事から、「医学教育の世界標準化と診療参加型臨床実習」の基調講演の後、医学、薬学、看護、理学療法それぞれの専門家から現状と課題が示された。

これを受け総合討論に入り、標準化の大きな柱が「診療参加型臨床実習」で、実際の診療に学生が参加するより実践的な教育であり、地域の医療機関を含めた地域全体での実地教育と共にチーム医療の促進の確立が重要で、さらに、チーム医療の促進のために、医学、薬学、保健学などの他職種連携教育の強化が課題であること、

また、熊本において地域医療を担う医療チームをどのように育成するのかを、実践力を育む実習と他職種連携を中心に議論を行った。

なお、開催に関しては実行委員会を設置し会議の内容の詳細を企画・立案した。

参加対象者は、医療関係の大学・専門学校等の教育関係者、各医療技術者協会の代表者、病院関係の代表者、行政関係の担当者のほかに新聞等で学生や一般参加者も募り、約 100 名の参加があり、後日熊本日日新聞紙面(R1.12.19)及び財団のホームページで内容を県民に公開した。

(4) 生活情報紙「あれんじ」の健康・医学・医療、その他関連記事の編集及び刊行 (収1)

熊本日日新聞社が発行するタブロイド版 16 頁の総合情報紙「あれんじ」(35 万部発行)の第一土曜日号の 10 面と 11 面の見開き 2 頁を使い、健康・医学・医療並びに医学に隣接した学問分野の学術情報を県民に提供した。

内容としては、「元気の処方箋」(最新の医学医療記事)と「子育て応援クリニック」(小児科関連の医学医療記事)を 12 回、「慈愛の心・医心伝心」(女性医療人のリレーエッセイ)を 8 回、「四季の風」(俳句欄)を 4 回掲載した。

以下に「元気の処方箋」のテーマを記載する。

- 4 月 骨髄移植とドナー登録
- 5 月 この時季は“春バテ”に注意 若者のメンタルヘルス
- 6 月 中高年の“お口”の健康
- 7 月 身近になった心臓の検査
- 8 月 夏休み 子どもの肥満に気をつけて
- 9 月 体と一緒に頭も鍛える コグニサイズをはじめよう (前編)
- 10 月 体と一緒に頭も鍛える コグニサイズをはじめよう (後編)
- 11 月 知識・意識をアップデートしよう エイズ・HIV 感染症
- 12 月 尿のトラブルはなぜ起きる 過活動膀胱を知ろう
- 1 月 婦人科がんと遺伝子検査 遺伝性乳がん・卵巣がん
- 2 月 自分らしく“生きる”ために 終末期医療を考える
- 3 月 突発性難聴と加齢性難聴

4. 学会・シンポジウムの助成 (公4)

熊本県下の医・歯・薬・保健学系教育機関や医療機関の研究者が開催する医学・生物科学関係の学会・シンポジウムに対して支援するため公募を行い、次のとおり助成した。

① 第 35 回熊本医学・生物科学国際シンポジウム (R1.11.11~14 開催)

5. 医学研究会・研修会等の助成 (他1)

(1) 熊本県下の医・歯・薬・保健学系教育機関や医療機関の研究者が開催する医学研究会並びに研修会等に対して次のとおり助成した。

- ① 熊大病院群卒後臨床研修プログラム研修医育成 (R1. 4. 1~R2. 3. 31 開催)
- ② 第 19 回熊本大学医学部医学科医学教育ワークショップ (R1. 10. 27 開催)
- ③ 第 20 回熊本エイズセミナー国際シンポジウム (R1. 11. 26 開催)
- ④ K's ギネ・パソ塾 (R1. 8. 24~8. 25 開催)

⑤ 第41回九州手外科研究会（R2.2.1開催）

(2) 学生活動に対して次のとおり助成した。

- ・令和元年度本九祭（熊本大学医学部学生主催 R1.9.28開催）

6. 広報活動事業（他2）

- (1) 本財団の活動状況及び財政状況等を周知するために、広報紙「ニューズレター 24号（A4判28頁）」を3,000部発行(R1.8.30)し、関係者へ配布するとともに本財団のホームページ上で内容を県内外に公開した。
- (2) ニュース性の高い分かりやすいホームページを目指し、内容を随時更新し、本財団の多彩な活動内容を県内外に公開した。